九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アイヌ語の接辞i/siと古代日本語の接辞、名詞i/siの同源性について

板橋, 義三
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・日本語教育講座

https://doi.org/10.15017/8607

出版情報：比較社会文化. 4, pp.99-118, 1998-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第4巻（1998）99〜118頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol. 4 (1998), pp. 99〜118

アイヌ語の接辞 i / si と古代日本語の接辞，名詞 i / si の同源性について

On Cognateship of the Ainu Affixes i/si with the Old Japanese Affixes i/si

板 橋 義 三*
Yoshizo ITABASHI

キーワード：接辞，人称代名詞，形態上の類似，言語接触

Abstract: This paper is an attempt to find out cognateship of the Ainu pronominals, affixes i and the related elements i / si with the various Old Japanese pronominals and affixes i / si. Many uses of i and most of the uses of si in both languages may be cognate with each other.

§0 はじめに

アイヌ語の接辞 i と si はこれまで特に研究されて来なかったし，またその起源や形成過程については特に手つかずの状態であった．この拙論では接触比較言語学的方法を援用し，その接辞 i と si の形成過程を探ってみる．

アイヌ語の接辞 i と si には様々な機能があるが，その機能は古代日本語と古代琉球語に見られる同接辞 i と si の機能と非常よく類似しているように思われる．まず，両言語の接辞 i と si のそれぞれの機能を詳細に探り，その類似性を見てみる．また，それぞれの機能は単なる偶然の一致なのか，一方から他方への借用なのか，または同起源の語なのかを探ってみる．

§1 アイヌ語の接辞 i の様々な機能

[1] 名詞群に付く接頭辞

(a) 一人称所有格指示用法

この接頭辞はもう一つの雅語の一人称所有格 a-の代わりとして使用されたと考えられている．その例は一つだけである．

(1) i-kamiasi ka i-ronronke i-sampehe ka i-hocirkar.
［金田一&知里 1936：70-1］

i-kamiasi ka i-ronronke
［1p.sg］-どこか［強調］［自動詞化］-痙攣する
i-sampehe ka i-hocirkar
［1p.sg］-心臓［強調］［自動詞化］-溶ける
「私のどこやらがヒクヒク動き，私の心臓もとろけるばかり」

この例では i-kamiasi と i-sampehe の i が一人称所有格を表しているが，金田一&知里（1936：71）ではこれは本来 a-kamiasi［所有格］と a-sampehe［所有格］となるべきところを後者の i-ronronke，i-hocirkar の i により押韻され i-に変化したものであり，「私にまで……」の意味の ethical dative であるとしている．しかしながら，この推論は一部妥当であろうと考えられるが，体系的説明であるとは考えられない．即ち，この接頭辞 i-が一人称であることはこの文の意味から確実であるが，問題の一人称所有格 i-が一人称対格・与格接頭辞 i-から発達したものであり，それが次の動詞接頭辞 i-の押韻によって変化したとすることには異論があり，その場しのぎの推論に過ぎないのではないかと考えられる．この一人称所有格接頭辞 i-は一人称対格・与格接頭辞 i-から発達したものではなくむしろ三人称所有格接頭辞 i-から発達したものであると考えら

＊日本社会文化専攻・日本語教育講座

れる．それはひとつにはこの問題の接頭辞 i-は対格・与格から主格・所有格を区別する機能をもっているし，またもしこの接頭辞が対格・与格の機能をもっているのであれば(しかし，それはこの接頭辞をもつ句が所有格なので不可能であるが)，この節全体の意味が不明となってしまうからである．

(b) 一人称対格・与格指示用法

形式名詞からきたものに一人称単数を示す接頭辞がついたものは数多く存在する．次の例文を見てみる［金田一 1960：80-1］．

(1) i-kotcake(-ta)
「私の前（に），私のため（に），私の代わり（に）」
(2) i-osimake(-ta) 「私の後ろ（に）」
(3) i-ka(-ta) 「私の上（に）」
i-ka-ta terke（＝i-ka-oterke)
i-ka-ta terke
[1p 単数]-上-に 跳びはねる
(＝i-ka-o-terke)
([1p 単数]-上-へ-跳びはねる)
「私の上に跳びはねる」
(4) i-oro-ta（雅語）「私/私達に/へ」
［金田一 1960：78］
cf_1. en-oro-ta（口語）「私に/へ」
［金田一 1960：78］
cf_2. i/un-oro-ta（口語）「私達に/へ」
［金田一 1960：78］
cf_3. e/i-oro-ta（口語）「お前/貴方（方）に/へ」
［金田一 1960：78］
cf_4. oro-ta（口語）「彼/彼達/そこに/へ」
［金田一 1960：78］
i-oro-ta reusi ［金田一 1960：79］
i-oro-ta reusi
[1p 単数]-下-に 宿す
「私の下に宿す」

この他にたくさん例があるので金田一（1960：80-1）を参照してほしいが，すべて名詞に一人称対格・与格接頭辞がついた形態は形式名詞となり，非常に生産的に使用されているものである．また，例 4 から分かるように，雅語では一人称与格・方向格は単数形も複数形も同形であったことと三人称は単数形も複数形も接頭辞 i-を取らない oro-ta の無表示形をとり，他の人称との区別をしていた．しかし，口語ではこの接頭辞 i-の機能が二人称にも派生しその分布範囲が広がり，二人称（敬称）の単数も複数もこの接頭辞で表されるようになったとともにこの二人称の敬称の区別も生じたと見られる．それはアイヌ雅語，口語において二人称接頭辞は e-[sg.]/eci-[pl.]であり，これらが本来の二人称接頭辞であったと考えられるからである．二人称敬称接頭辞 i-は一人称複数接頭辞 i-から派生したものであり，それは一人称複数［包括形］は二人称をも含むからであり，事実このような人称変化は色々な言語で見られ，その傍証にもなるものと考えられる．

(c) 三人称'強調'所有格指示用法

一般に三人称主格，対格，与格を表す接頭辞はなく，それはまた所有格にも同様なことが言える．しかし，所有格にまれに i-が用いられ，それは expletive と考えられる(金田一&知里 1936：71)．つまり，これは強調または詠嘆の意味が込めてあると考えられるとしている．次にその例をいくつか挙げる．

(1) i-yupi 「彼の兄」＝yupi
(2) i-siki 「彼の目」＝siki
(3) i-teke 「彼の手」＝teke
(4) i-mataki 「彼の妹」＝mataki

この用法は多分雅語の一人称単・複数の用法が二人称の用法に派生し，それがさらに三人称に付くようになって強調または詠嘆の意味をもつようになったものではなく，本来三人称の用法として存在していたのが，一人称に派生し，さらに二人称にも派生したものだと考えられる．この三人称所有格は指示詞 i「それ」からの派生ではないかと考えられ，それは特に三人称代名詞が存在しないような場合，指示詞がそのギャップを埋めることが普遍的傾向だからである．

[2] 動詞群に付く接頭辞

(a) 一人称対格・与格指示用法

まず次の例文を見てみる（ポン・フチ 1993：77-8）．

(1) a-kor-sapo i-resu
a-kor-sapo i-resu
私-持つ-姉 私を-育てる
「私の姉が私を育てる」
(2) pon menoko i-ko-he-puni
pon menoko i-ko-he-puni
若い 娘 私に-向かって-顔を-上げる
「若い娘が私に向かって顔を上げる」
(3) ku i-kore yan
ku i-kore yan
弓 私に-持たせて ください
「弓をください」

これらの例は「私に，私を」という特定の人称を指示し

ている．その点が(b)と異なる点である．またこれらの例はユーカラからの引用である雅語であり口語ではない．従って，これらはより古い機能を表していると見てよい．(a)と(b)の両方から分かるように，この雅語の接頭辞は一人称の単数と複数の両数を表しており，口語では単数形が en-，複数形が un-(除外形) と i-(包括形) の二つに分裂している．また樺太アイヌ語では一人称単数・複数形は i-/in-であり，本来の一人称は i-であったと考えられる．

(b) 一人称複数用法：ある特定の人を指さず，一般的な人を意味するもの

次の例を見てみる（ポン・フチ 1993：77）．

(1) i-ram-tuypa
i-ram-tuypa
我ら/人に-心を-何度も切る
「びっくり仰天する」＞「驚いた！」

(2) i-ram-tuy-ne-re
i-ram-tuy-ne-re
我ら/人に-心を-土に-さ-せる
「すくむように驚く」＞「驚いた！」

(3) i-ram-sit-ne-re
i-ram-sit-ne-re
我ら/人に-心を-もつれ-さ-せる
「ごちゃごちゃと煩わしい」＞「やかましい！」

(4) i-ram-ayay-se-re
i-ram-ayay-se-re
我ら/人に-心を-泣か-せる
「心底から泣く」＞「かわいそうに！」

(5) i-yay-ray-ke-re
i-yay-ray-ke-re
我ら/人に-自分を-殺-さ-せる
「非常に有り難い」＞「ありがとう！」

これらの例はすべて慣用句的な表現のみであり，その点においてはこの接頭辞は化石化したものであると言えるのではないか．従って，本来この接頭辞 i-は一人称を示すものとして生産的に機能していたものと考えられる．

またこれらの例文における接頭辞はすべて一人称複数与格を示しており，この一人称複数が人間一般に意味が拡大したものである．またこの接頭辞 i-直後の名詞は所有格ではないので，この接頭辞 i-は所有格ではないことに注意されたい．

(c) 三人称主格指示用法：「それが」(主格) を表すが，この場合の「それ」は環境又は慣用によって相互に了解し得るものを指す．

まず次の例文を見てみる（金田一&知里 1936：71）．

(1) ipokas「醜い」＜ i-pokas
「それ（容貌）が劣っている」

(2) iyoikir「それが詰まっている列」＜ i-o-ikir
「宝物が詰まっている列」

(3) iomai「女陰」＜ i-oma-i
「それ（男根）がはいるところ」(萱野 1996：79)

これらの例文では接頭辞 i-はすべて三人称主格を示している．例 2，3 は文ではなく名詞節であるが，接頭辞 i-が主格を表すのでここに挙げておく．この機能の例はほかには見つからないし，例文 1，2 は雅語，例文 3 は現代語であるので，これは次の二つのことが考えられる：

(1) 三人称主格接頭辞 i-が本来存在し，その後その接頭辞 i-が脱落し三人称は無表示となり，それが支配的となった．そのため雅語や現代語における形態はほとんど化石化してしまった．

(2) 本来三人称主格接頭辞 i-は本来存在せず，三人称主格接頭辞は一人称対格，与格かまたは格接辞以外の接頭辞から発達したものとも考えられる．

どちらにしても決定的な直接的証拠はないと考えられるが，史的類型変化を考慮すると，(1)では体系的に三人称主格接頭辞 i-が雅語に化石化したことを説明できるのに対し，(2)では一人称（二人称も可）主格接頭辞がまず雅語には見られないが，もし見られたとしても，それが三人称主格接頭辞に発達したことを体系的に検証することができない．さらに(2)では，三人称から一人称への発達は多く存在するが，その逆はあまり見られない，という一般的傾向から逸脱している．従って，(1)の説の方がより説得力をもつのではないかと考えられる．

(d) 三人称対格特定指示用法

「それを」(対格) を示し，最も本質的なものとして選ばれる「そのもの」を指す（金田一&知里 1936：72；ポン・フチ 1993：77）．

(1) i-ri 「それ（皮）を剝ぐ」 ＞「皮剝ぎ」
(2) i-ku 「それ（酒）を飲む」 ＞「飲酒」
(3) i-ca 「それ（穀物の穂）を切る」 ＞「穂ちぎり」
(4) i-carpa 「それ（御馳走）を撒いて供養する」 ＞「祖先祭り」
(5) i-omante「それ（熊の魂）を行かせる（送り出す）」 ＞「熊祭り」
(6) i-oske 「それ（綱など）を編む」 ＞「編み物」

ある特定のものを指すこの機能は i-が付くことにより他動詞から自動詞へ変化している．またこのような自動詞

への変化とともにそれ自体が名詞化されたことを意味している．即ち，この機能は自動詞化とともに名詞化の二つの機能を有しているのである．しかし，どちらの機能かは統語的位置により判断される．

(e) 三人称対格指示用法

「それを」(対格) を示すが，「それ」は漠然としたものを指す (金田一&知里 1936：71-2；ポン・フチ 1993：76-7)．

(1) i-tak 「それ（言葉）を招く/呼び寄せる：語る」>「言葉」
(2) i-ki 「それ（もの）をなす」>「行為」
(3) i-mi 「それ（服など）を着る」>「服装」
(4) i-pe 「それ（もの）を食べる」>「食事」
(5) i-nukar 「それ（もの）を見る」>「見物」
(6) i-yoyra<i-oyra「それ（もの）を忘れる」>「物忘れ」

機能に関しては上記(d)と同様であり，名詞化も全く同様に可能である．ここでいう漠然としたものは実際「それ」と訳すより「もの」と訳した方がより的確かもしれないが，基本的には上記の(d)と(e)は全く同じであり，その i-の指示物の範囲によって(d)か(e)になるのである．

(f) 三人称対格不定指示用法

現代アイヌ語には三人称単数対格・与格指示用法の延長として「非人間」に対する「人間」を意味する用法が存在する．次の例文を見てみる (萱野 1996：43，44，76，77，83)：

(1) i-e-tapkar [1996：43]
i-e-tapkar
[3p.sg]-と-おどる
「彼（女）と踊る」
(2) i-wen-te [1996：44]
i-wen-te
[3p.sg]-悪い-[使役]
「彼（女）を悪くする」
(3) i-wen-te-p [1996：44]
i-wen-te-p
[3p.sg]-悪い-[使役] -人
「悪魔」
(4) i-ahunke [1996：76]
i-ahunke
[3p.sg]-いれる
「彼（女）をいれる」
(5) i-o-itak-usi [1996：77]
i-o-itak-usi
[3p.sg]-[3p.sg] -言葉-付く
「彼（女）を呪う」
(6) i-resu-totto [1996：83]
i-resu-totto
子供-育てる-母親
「養母」

これらの例文では接頭辞 i-がすべて一般的な不定の人を指しているが，例文 6 のように接頭辞が単なる人ではなく，子供を指す場合もある．また，例文 3，6 を除いて動詞はすべて他動詞から自動詞に変化していることに気づく．さらに例文 1 のほかはすべて対格である．

この用法は他の三人称の用法と軌を一にし，本来はその区別はなかったものと考えられる．しかし，時代とともにこの三人称の転用が起こり，定から次第に不定へと移行すると同時にそれ以前の用法も保持し，その区別が生じたものと考えられる．

また上記の(c)(d)(e)(f)はすべて三人称を示している点で共通しているが，これは動詞群に特有のものではなく，上記に見たように名詞群と同様に一人称の意味も存在している．

[3] 名詞群に付く接尾辞

(a) 三人称所有格指示用法

所有格接尾辞-i/-hi (-e/-he;-a/-ha;-u/-hu;-o/-ho) をとるある限定された名詞がある．これらの名詞は次のような音変化をする (金田一&知里 1936：9；金田一 1960：34-41)：

母音に終わる開音節の語はそのままでよい．終わりの母音を十分に発音するだけ．

十分に発音する結果長めに呼ばれて，たまたまアイヌに長音がないから h 音でその母音を呼ぶ一音節が加わる (金田一 1960：34)．

最後の母音を反復して造るものもある (金田一 1960：37)．

(1) ona「父」>oná >onaa >ona(ha) 「彼(女)の父親」
(2) unu「母」>unú >unuu >unu(hu) 「彼(女)の母親」
(3) sik「目」>sikí >sikii >siki(hi) 「彼(女)の目」
(4) tek「手」>teké>tekee>teke(he)「彼(女)の手」

上述のようにアイヌ語（北海道方言）には音韻上の長短母音の区別がないので，長母音化することを回避する傾向がある．そのためどの母音に最も近い調音点をもつ-h-が挿入されることになるのである．従って，本来の接尾辞は

この-h-を含まない形態であると考えられる．
また上記のように接尾辞の異形態が五つのあるので，そのどれかが本来の接尾辞の形態であろうと思われるが，Vovin (1993：43-47) はこの点において次のように述べている．即ち，この所有接尾辞をとる名詞をすべて取り上げ，それをその名詞の語末の母音とその接尾辞の母音の関係を調べたところ，接尾辞-i はすべての語末の母音に無関係に現れるが，頻度は接尾辞-i に比べて非常に低いが，接尾辞-u も語末の母音-a,-u のときに現れるということが分かったという．これは二つの形式（-a［語末母音］+-i［接尾辞］と-a［語末母音］+-u［接尾辞］）の区別があることを暗示しているように見えるが，接尾辞-u との呼応（-i-u (1件)，-u-u (3件)，-e-u (0件)，-o-u (0件)）がほとんど見られないので，この接尾辞 u-が本来の形態であるとは積極的には言いがたい(しかし，Vovin は u-も本来の形態であるとしている)．従って，この段階では本来の三人称所有格接尾辞は＊-i だけであると考えるが，この接尾辞-u も本来の形態を保存している可能性がないでもない．

［4］動詞群に付く接尾辞

(a) 他動詞化用法

先に他動詞の自動詞化/名詞化接頭辞 i-を見たが，これはこれと全く逆で自動詞を他動詞に変化させる用法であるが，前者と異なり，名詞化用法はない．このような自動詞の数はちょうど[3](a)の三人称所有格指示用法のように少ない．

まず，次の例をみてみる(金田一&知里 1936：77-9；金田一 1960：179)：

(1) us-i「付ける」<us「付く」[1960：179]
(2) as-i「立てる」<as「立つ」[1960：179]
(3) an-i「もつ」<an「ある」[1936：79]
(4) car-i「撒く」<car-ke「散らばる」[1936：78]
(5) tur-i「伸ばす」<tur「伸びる？」[1936：78]

この他に多くの例は上記の著書を参考にされたい．この接尾辞-i は以前生産的であった接尾辞が化石化し，その痕跡を上記のような形で残存させたのではないかと考えられるが，三人称所有格指示用法の接尾辞-i と同様で，この他に異形態［-e,-a,-o,-u］が存在している．一見した所，例外はあるものの，名詞の語末母音と接尾辞の母音が同じであり，お互いに相補的分布をなしているように見える．しかし，Vovin (1993：47-51) は，これらが相補的分布をなしてはおらず，本来の接尾辞の形態は-i と-u だけであって，その他の形態は派生形態であるとしている．上述の三人称所有格指示接尾辞と同様に，Vovin は問題となるすべての動詞を取り上げ，その語末母音とその接尾辞の母音の関係を調べたところ，上述のように接尾辞の形態は-i と-u だけであることが判明したとしている．確かに接尾辞-i は問題なく本来の他動詞化接尾辞であるとしてよいが，もう一方の-u が同様に本来の他動詞化接尾辞であるとしてよいかは問題である．それは主に-o[語末母音]+-u[接尾辞]をとる接尾辞-u は全くなく，また-i[語末母音]+-u[接尾辞］をとる接尾辞-u はたった三度しか現れないのに対し，接尾辞-i はどの語末母音であっても現れることから接尾辞-i の優越度が目立つからである．従って，この二つの形式［接尾辞-i 対-u］は現実的なものとは考えにくい．その点から本来の他動詞化の接尾辞の形態は＊-i のみであると考え，-u に関してはその可能性を全く捨てた訳ではないが，非常に低いのではないかと思う．

(b) 名詞化用法

この接尾辞は動詞と形容詞から名詞をつくり，「……する事/する時/する者」などの意味で使われる．まずその例をいくつか見てみる（金田一&知里 1936：48；金田一 1960：68)．

(1) san-i「出，子孫」 <san 「降る，出る」
(2) esan-i「坂」 <esan 「そこ降りる」
(3) itak-i「物言い」 <itak 「語る」
(4) pirka-i「善，善事」 <pirka 「よい」
(5) ramu-i「思うこと」 <ramu 「思う」
(6) an-i「存在，ある所/時」 <an 「ある」

ここに挙げた例は4を除いてすべて動詞からの派生である．特に興味を引くのは例3で，この動詞自体が名詞でもあり，上記の例としても挙げたように，tak という動詞は「招く」と言う意味であり，それに接頭辞と接尾辞の i が付いて i-tak-i という名詞をさらに派生している．ある意味ではこれは名詞のさらなる名詞化であるが，その意味はより抽象的になっている．つまりこの接尾辞の-i は接頭辞の i-とは名詞化の内容が異なり，一般に接尾辞の-i は具象的な名詞化であるのに対して接頭辞の i-は抽象的な名詞化という傾向にあると考えられる．ここで『傾向』といっているのは例1の「子孫」や例2の「坂」のように，やや具象的な物に名詞化されているものもあるからである．

一般に接尾辞として-i が使われるが，時には'-hi'も使われ主に母音の後である．この接尾辞の本来の形態は i-なのか，それとも hi-なのかが問題となるが，口語ではほとんど i-が使用されるが，時折 hi-が母音直後にのみ使用されるところから，-i と-hi は相補的分布をなしたのかもしれない．しかし，接尾辞-i に直接影響を与えない語末子音はその直後の母音接尾辞-i を必ず取るということを事実示していることから，また三人称所有格指示接尾辞-i/-hi の場合と

同様で名詞化接尾辞の本来の形態は＊-iであろう．さらに語根と接尾辞の間には区切りがあり，その接尾辞母音が強調されるので，語末母音と接尾辞の結合による二重母音にはなり得ず，連母音となり，さらにそれぞれの母音が強調されるとその間に-h-が挿入される事となる．この点から考えても，接尾辞の本来の形態は＊-iであろうと推測される．この変化過程を図式化すると，以下のようになる．

(1) ramu「考える」>ramu＋ i >ramui ［>ramuhi］
(2) oka「ある」 >oka＋ i >okai ［>okahi］
(3) pirka「よい」 >pirka＋ i >pirkai ［>pirkahi］

以上のことから，一般に接尾辞＊-iは『指示的な機能をもった代名詞的な接辞』と呼べるのではないかと思う．このことは非常に重要で，後で日本語と琉球語との比較の中で見るように，共通項として表れる．

§2 アイヌ語のsiの様々な機能

［1］名詞群に付く接頭辞

(a) 「本当の」「真の」

接頭辞siは「本当の」「真の」の意味を付け加える．ここでの「本当の」の意味は「中心/主流となる」といった意味であり，「真の」の意味は強調を表すものと見られる．例をいくつか挙げる．（金田一&知里 1936：110；金田一 1960：157）

(1) si-pet 「本流」 <pet 「川」
(2) si-so 「本座/右座」<so 「座席，床」
(3) si-cupka 「真東」 <cupka 「東」
(4) si-cuppok 「真西」 <cuppok 「西」
(5) si-ipe 「しゃけ」<「本当の食べ物」<ipe「食べ物」

例1，2，5は「本当の」という意味で使用されているものである．例3，4は「真の」という意味で使われている．田村（1988：67）はこのsi-は本来動詞ではなかったかと述べているが，それを裏付ける証拠が存在しないように思う．逆にこれは本来名詞ではなかったかとも考えられる［(b)参照］．意味上からは強調の機能が最も本来のものであろうが，そこから「本当の」と言う意味に派生したのではないかと考えられる．

(b) 「大なる」

「大なる」という意味を付け加える．いくつか例を挙げておく（金田一&知里 1936：110；金田一 1960：157；藤原 1994：128-143）．

(1) poro si-apka「大なる真牡鹿」
<apka「牡鹿」 ［1960：157］
(2) poro si-us「大なる大港湾」
<us「所」 ［1960：157］
(3) si-poro-pet「荒々しい川」
<pet「川」 ［1994：132］
cf.pon mo-nai「穏やかな川」
<nai「沢，川」 ［1994：124-5］
(4) si-soya「大黄蜂」
<soya「黄蜂」 ［1936：110］
(5) si-atui noski「大海の中央」
<atui「海」 ［1960：157］

このすべての例において接頭辞si-は「本当の，真の」の全般的な意味をもつと考えられるが，例1，4では，「強い，荒々しい」などのより狭い意味をもち，例3ではcf.の「穏やかな」に対する「早瀬」の意味になる．また，例1，2と例3の接頭辞si-の位置が異なっていることが分かるが，例1，2ではsi-は形容詞poroと名詞apka/usの間に位置して，直後の名詞apka/usを接頭しているのに対し，例3ではsi-が形容詞poroの前にきて，その後の形容詞poro＋名詞pet全体を接頭している．即ち，接頭辞si-が名詞を直接接頭するかどうかでその位置が異なってくると見ることができる．また例3の接頭辞si-をその直後の形容詞を修飾する副詞とも考えることができるが，ここでは接頭辞として統一しておく．文中における位置が割に自由であった点から考えると，接頭辞si-は本来名詞的な存在ではなかったかと考えられる．

この接頭辞si-は上記(a)の「本当の」という意味から派生して来たものと考えられる．つまり，「本当の」と言う意味は「中心/本流の」という意味で使われているが，一般に「中心/主流となる」ものは「大きい」方が無標であるから，「大なる」という意味に派生したものと考えられる．勿論，この「大なる」という意味は時として「強い，主な，重要な」のような意味を暗示しており，生物が問題になっているのか生物以外のものが問題になっているのかによって，その文の意味が決定される．口語ではcf.の例が示しているように，mo-「弱い，穏やかな」等の意味を含意したのに対する反意語としてsi-「強い，荒々しい」などの意味が含意されている（si-yuk「熊」に対してmo-yuk「タヌキ」；si-sir「山岳」<「人が住めない場所」に対するmo-sir「真の土地」<「人が住める場所」）．

(c) 再帰的用法：「自分（自身）」

この用法は雅語でも口語でも名詞とともに使われ，「自分（自身）」という意味が一般に付け加わる．次の例を見てみよう（金田一&知里 1936：110；萱野 1996：260-72）：

(1) si-etu-uina「自分の鼻をつまむ」

＜「自分-鼻-つまむ」 [1936：110]

(2) si-par-uina「自分の口を覆う」
＜「自分-口-覆う」 [1936：110]

(3) sisam-utar＜si-sam-utar「和人」
＜「自分-隣-友人」 [1996：264]

(4) si-oka-un＜si-oka-un「自分の後ろに」
＜「自分-後ろ-に」 [1996：260]

(5) si-or-orun「自分自身の場所で/に」
＜「自分-所-で/に」 [1996：272]

上例1，2における接頭辞 si-は普通名詞が直後にきた場合であり，すべて「自分」と訳せるが，その直後の名詞が所有格を示していないので，この si-は人称所有格指示接頭辞 i-などと異なりより名詞的な存在である．それに対して，例3，4，5はその直後に位置名詞がきた場合であり，その場合にはこの接頭辞 si-は所有格や他の格をとる必要はない．即ち，どの場合でもこの si-は「自分」と訳せる．金田一&知里ではこの si-に「自分の」という所有格を与えているが，それは本来存在しないものであり，日本語の訳に統語的に生じてくるだけである．

この si-は下記の動詞に付く接頭辞 si-「自分（自身）」と本来同じものであろうと思われる．

[2] 動詞群に付く接頭辞

(a) 再帰用法：「自分（自身）」

意志的な yai-に対する si-は無意志的であり，「自分自身」を付け加え，再帰的意味となる．次の例文を見てみよう（金田一&知里 1936：110；金田一 1960：153-8）．

(1) si-etaye「自分を引く，退く」 [1936：110]

(2) si-suye「揺れる，自分を揺する」 [1936：110]

(3) si-moye「動く，自分を動かす」 [1936：110]

(4) si-kasui-re「自分に手伝わせる，手伝ってもらう」 [1936：110]

(5) si-nukar-e「自分を見せる，人目を引かせる」 [1936：110]

(5-1) rorunpe etokta yaikamui-sinukare [1936：110]

rorunpe etokta yai-kamui-si-nukare
戦い 前に 自分の神-自分-見せる
「戦いの前に自分の神を祭る」

(6) ainu otta sinomiyar [1936：110]

ainu or-ta si-nomi-yar
人 に 自分-祭る-させる
「人に祭られる」

どの例文も再帰的意味が保存されているとともに，それが無意志的であることも表されている．例1，2，3，5は si-が対格を，例4，6が与格をあたかも示しているかのようであるが，si-自体は格を示すものではない．格は統語的に決定されるのである．

また例の1から3までは再帰的な意味が消失し単に他動詞や自動詞を作っているが，その他の例では再帰的な意味がそのまま保持されている．ここではいうまでもなく動詞のみに付いた時の意味・機能の変化である．

(b) 使役動詞的用法

「～のふり/まねをする，～を装う」という意味を表す．次の例を見てみよう（金田一&知里 1936：111）

(1) si-aspa-re「聾を装う，聞こえないふりをする」

(2) si-ihosiki-re「酔ったふりをする」

(3) si-rai-re「死んだまねをする」

(4) si-hacir-e「落ちるまねをする，わざと落ちる」

(5) si-ne-re「～を装う，～に化ける」

(6) si-okkai-nere「（女が）男を装う」

上でも断っているように-re/-e が接尾辞が付いて使役動詞を作り，その使役形をもつ動詞に接頭辞の si-が付く．例3，4のように英語の名詞や形容詞などの進行形の機能とやや類似する点があり，ある特定の時空で一時的にそのように振る舞うといった状態性を表しているように思われる．ある意味ではある特定の時空における動態性の強調的な用法がより特殊化したものと考えてもよいと思われる．この用法はおそらく(a)「自分自身」と直接的に関係していると思われるが，ここでいう使役は「自分自身に対してある動作や状態を意識的に架空のものまたは一般にあるべき姿ではないものにすること」であり，ここでも「自分自身」への指示が特殊化したものと考えられる．

[3] 名詞群に付く接尾辞

(a) 強勢用法

強勢語には次の四つがあるが，どれも接尾辞-si が付いた形態になっており，おそらくこの-si は化石化したものであり，これらの語にしか現れないようである（金田一&知里 1936：144）．

(1) tasi「こそ」＜ta-si

(2) nesi「こそ」＜ne-si

(3) nesun「こそ」＜nesi-un＜ne-si-un

(4) kasi「（そ）の上」＜ka-si

アイヌ神謡集（78；122）には推量の係り結びがあり，an-ne（sg.）または okai-ne（pl.）で結ぶのが見られ，この強勢語は強調の機能を果たしている．

(1) pon horkeu sani e-ne ruwe tasi an-ne.

pon horkeu sani e-ne
小さな 狼 血統 [2p.sg]-である
ruwe tasi an-ne
[接尾辞：確説] [強調] ある-である
「小狼子にてこそ汝はあんめれ」

(2) wakka ewen hawe nesun okai-ne.
wakka ewen hawe nesun
水 欠く [接尾辞：伝聞] [強調]
okai-ne
[ある pl.] -である
「水がなくて苦しんでいるんだな」

この上記の二例では tasi と nesun がその次の an-ne と okai-ne でそれぞれ結んであるが，本来はこれらの係り結びがなくても強調の機能を果たしていたと思われる．それが時を経て行くごとにこの係り結び的なパターンが頻繁に使用されるようになり，最終的にはこのパターンが係り結びとして再分析されるようになったのであろう．

[4] 動詞群に付く接尾辞

アイヌ語には動詞群に付く接尾辞 si-は存在しないようである．

以上の si の機能を一くくりにすると，名詞群に付く接頭辞の内，「本当の，真の，大なる」を表す si-と名詞群に付く接尾辞-si は『強調』という共通した機能をもっているように考えられる．即ち，『指示的な機能から派生した強調という意味を特にもっている』と言い換えることも可能ではないかと思う．また名詞群に付く接頭辞の再帰的用法と動詞群に付く接頭辞の再帰用法はその動作が自分自身に戻ってくることから自分自身への指示という特殊化した用法とも考えられる．また，上述したように使役動詞的用法は「再帰（的）用法」の特殊化したもの，即ち指示機能の特殊化したもののように見える．これらの機能は「指示」という点において§1で見た i の機能に似ていると見ることができるが，si の機能分布はより狭いが，その限定性の機能はより穏やかで弱いとみることができるようである．

§3 古代日本語と古代琉球語の接辞 i の様々な機能

[1] 人称代名詞用法

[1.1] 二人称代名詞

(a) 古代日本語

二人称代名詞には na, nare, si, $o_2$re が i の他にあるが，この i は相手を軽んじて言うときに使われると言われている．またこの i は実際にはその直後に主格接尾辞 ŋga しかこない例のみである．

(1) いが造り仕え奉る大殿の内...
[古事記 神武即位前]
「貴様がお作り申し上げている御殿の中...」

(2) いが命またあらずや [日本書紀 皇極紀 2 年]
「おまえの命はあるだろうか」

例 1 では「い」が中期中国語（MC）の表音文字の {伊} /ʔ i/ で表されているのに対し，例 2 では MC の表意文字の{儞}/ńźie͡:/で，二人称代名詞を表す．従って，例 1 のみが二人称代名詞の i を表していると見られる．ここでは例 1 のみならず一般に i と解釈されているものも含めて考える．

事実，この i の例は非常に少ないため，古代日本語の時代にはあまり生産的ではなく，ほとんど使用されなくなっていたのではないかと考える．もしそれが事実であるとすると，この i の起源は非常に古いと考えてよい．しかしながら，この i は三人称代名詞としては文献上見られないが，指示代名詞用法があることから三人称代名詞用法もあったと見てよいと思われる．従って，この二人称代名詞の用法は三人称代名詞からの派生かも知れない．

(b) 古代琉球語

古代琉球語ではこの i の二人称代名詞の用法が見られない．しかし，古代日本語の同じ人称代名詞 i が一部対応すると思われる前古代琉球語の二人称代名詞 *ire< *i+ *re が存在したと考えられる．これは沖縄方言の南部における相手を軽視した二人称代名詞 ya と ʔ ya から前琉球語として復元したものであるが，この *ire は北部と南部方言（徳之島，与論島，奄美，与那国など）からの尊敬を表した二人称代名詞の復元形 *ore と対をなし，これから *i が抽出できる．ここではその方言形を一つ挙げておく．

(1) ya ga katʃi bitʃi [沖縄：内間 1984：443]
ya ga katʃi bitʃi
[2p.単数] [主格] 書く べき
「お前は（それを）書くべきだ」

古代琉球語では二人称代名詞としての i の例が方言形に見られないし，また古代日本語でもそれほど生産的な代名詞ではなかったので，二人称の用法自体が本来のものではなく一時的に使用された用法である可能性が高いのではないかと考えられる．しかし二人称代名詞としての用法が本来存在しそれが化石化して行くに従って，その派生的な用法である三人称代名詞の i が急激に衰退，消滅した可能性もないこともない．しかしながら，二人称と三人称の生産

性から考えると，やはり後者，即ち，三人称代名詞としての用法が本来的ではないかと思う．後に詳しく見るが，i と関係の深いと考えられる si の用法は古代日本語では二人称代名詞としての用法よりも三人称代名詞と指示代名詞として用法が主であり，また i も三人称代名詞としての用法はないが指示代名詞としての用法があり，このような事実に照らし合わせると，i と si は本来三人称代名詞と指示代名詞の区別がなく『指示を示す代名詞』のような機能をもっていたことが考えられる．この上記のような事実は逆に i と si が本来二人称代名詞ではなかったことの傍証になるのではないかと考えられる．

[1.2] 三人称代名詞

(a) 古代日本語

古代日本語における i の用法は見られないが，指示代名詞の用法のみが見られる．その指示代名詞としての用法は後に詳しく述べる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語においても古代日本語と同様で i の三人称代名詞としての用法は全く見当たらない．また後節で言及するが，古代琉球語の i の指示代名詞としての用法も見られないが，si に名詞用法が一つ見られるのみである．

この古代日本語，古代琉球語の代名詞用法はアイヌ語の三人称代名詞（強調）所有格用法と比較できるのではないかと思われる．アイヌ語のこの所有格用法には強調所有格用法と単なる所有格用法があり，前者はこの接頭辞 i-は必須ではないので，統語的には異なるが，形態的には三人称代名詞と同形となる．全体的に人称代名詞用法は日本語では人称に焦点があるのに対し，アイヌ語では人称だけでなく格にも焦点がある点が異なるが，どちらも人称を区別するものとして接辞があることが共通している．その点でこれらの人称代名詞の用法が比較できるし，また同起源の蓋然性も高い．それは人称という機能範疇と発達形態が非常に類似していることによるのである．

[2] 名詞群に付く接頭辞

古代日本語や古代琉球語の i には人称代名詞以外に様々な機能が見られる．これらの機能はそれぞれ独立して全く異なるものではなく上記の代名詞の機能とも深い関係が存在すると見られる．これは全く si についても同様であるが，それについては次節で詳細にわたって見て行く．これまで先人のほとんどがこれらの機能を独立した，互いに関連のないものとして考え研究してきたが，実際にはこれらはすべて一くくりにすることが可能であり，そのほうがかえって一貫性があるとみられるので，その一くくりの枠組みでそれぞれの機能を見て行くことにする．また接辞においても一貫して「用法」という用語で通すが，これは日本・琉球祖語においては勿論前日本語においても形式としての格形態が存在したとは言いにくいので，この用語を使うことにする．

[2.1] 強調用法

(a) 古代日本語

名詞群に付く接頭辞としての用法は古代日本語にはほとんど見られないが，例として一つだけその可能性があるものがある．その機能は強調と考えられる．

(1) 隠口の泊瀬の川の上つ瀬にい杭を打ち...

[万葉集 3263]

「泊瀬川の上の瀬に杭を打ち...」

この例が一つしか見当たらないが，この「い」は MC 伊/？i/の表音文字で表されているので，この名詞に接頭する i が存在していたことは間違いない．邦訳においてこの「い」は「斎」の漢字を使用し，「斎み清めた，神聖な」の意味を加え美称としたと考えられているが，この文脈からはその神聖さが感じられないこと，またこの「斎」の読みはもうひとつあり「ゆ」とも読めるが，この「杭」に関してはその読みがないことなどから，特にこの歌に関しては本来強調の意味をもつ「い」が使われていたのが，この「斎」の意味が広がるに従って本来の意味を失い，ほかの「斎籬，斎串」などのような用法がその分布範囲を拡大し使われるようになったことから，この「斎」の意味として使用されるように意味上の再分析が起こった，所謂，民間語源と考えられる．崎山 (1990：208) にはこの点に関して詳しい説明はないが，同様のことを述べている．

(b) 古代琉球語

古代琉球語では名詞群に付くだけでなく形容詞にも付く接頭辞の用法が見られるとともに動詞群にも付く接頭辞の用法があるので，後者二つは後程例を挙げるが，前者の例を一つ挙げておく．

(1) ʃiForaʃi i-kotoba-ya... [琉歌 224]

ʃiForaʃi i-kotoba-ya

優美な [強調]-言葉-[詠嘆]

「優美なその言葉...」

この i はその直後の名詞 'kotoba' を強調したものと考えられるが，後に挙げる形容詞や動詞の場合でも同様である．この場合の i の機能は名詞の孤立形形成接尾辞-i，即ち，指示・強調代名詞化の機能と全く同じである．

[3] 動詞群に付く接頭辞

[3.1] 強調用法

(a) 古代日本語

古代日本語には接頭辞 i-をとった動詞の例が万葉集にたくさんあるが，生産性は割に高かったものと見ることができる．次にいくつかの例文を挙げる．

(1) しただみのい這ひもとほり... [古事記 神武]
「細螺のようにはい回って...」

(2) 吾が背子がい立たせりけむ... [万葉集 9]
「愛しいあなたがお立ちになったという...」

(3) 吾が日の皇子のいましせば... [万葉集 173]
「わが日の皇子がもし御在世であったら...」

例1と例3は MC 伊/？i/の表音文字で表されているが，例2の「い」は MC射/i͡äk/で表されており，意味は全く無関係であり，表音文字として使用されていると考えられる．従って，例1と例3の「い」の表音文字で示されている事からだけ考えると，動詞に接頭する i の存在が確認される．

この i-がついている動詞とそれに対応する i-がついていない動詞とを比較して，この i-の本来の意味は全く失われて分からないが，多分その動詞が示す動作や状態の強調する機能ではないかと思う．そのように考えることが最も妥当性があり，一貫しているのではないかと思う．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様にこの接頭辞は生産性が高く，多くの例が見られる．また古代日本語とは異なり，古代琉球語では形容詞にもこの i-が付いた．いくつかの例を示す．

(1) toʃi-ka mitose i-kiyote...
[おもろ 12-7 (658)] [動詞]
toʃi-ka mitose i-kiyote
年-[属格] 三年 [強調]-招く
「三年目に（女神）を招いた」

(2) mi-inotʃi-no tsuna mi-hoʃi-no tsuna i-jiyoku,...
[南島歌謡（上）0-29-29] [形容詞]
mi-inotʃi-no tsuna mi-hoʃi-no
[尊敬]-生命-[属格] 綱 [尊敬]-星-[属格]
tsuna i-jiyoku
綱 [強調]-強い
「生命と星の綱が大変強いので，」

例文1では動詞の直前に付く接辞，あるいは動詞の接頭辞として考えることができるが，意味上ではこの i を三人称代名詞と考え，アイヌ語の i の機能の一つのように他動詞を自動詞に変換する機能，または単に動詞を強調する機能と見られる．前者の場合では，この文の前部分には対象が特定されていないので，この i を自動詞化する機能と考えられる．また後者の場合であれば，この i を三人称代名詞と考えず，動詞に接頭する直示名詞の強調機能とも考えることも可能である．前者の解釈も明解であるが，例文2の機能を考慮し例文1との共通の機能として考える時，後者がより妥当な解釈であると考えられる．ついでながら，どちらにしてもこの i を主格を表す機能とは考えにくい．それはこの文の主語に接尾しないからである．

例文2では形容詞に接頭しているので，例文1と同様に主格を表している蓋然性はない．またこの i は接頭される品詞が形容詞なので，当然三人称代名詞の自動詞化する機能ではない．従って，形容詞に付く直示名詞の強調機能と考えられる．

[4] 名詞群に付く接尾辞

[4.1] 主格・強調用法

(a) 古代日本語

古代日本語には接尾辞として使用された-i は次の四つの機能をもっていたと考えられる．主格・強調機能，対格・強調機能，処格機能，名詞の被覆形形成機能の四つである．順に次に例を挙げながら見て行く．

(1) 奈良麻呂小麻呂らい逆縞なる共柄を誘い率いて...
[続宣命 19]
「奈良麻呂，小麻呂らが反逆者を率いて...」

(2) 在千潟在り慰めていかめども家なる妹いおぼしみせむ
[万葉集 3161]
「ここでこうして心を慰めていこうと思うが，家の妹が退屈するだろうな」

例1，例2ともに MC 伊/？i/の表音文字を使用しているので，この主格強調の機能をもつ i が存在していたと見ることができる．

例1では「奈良麻呂，小麻呂ら」が，例2では「妹」が主語となり「い」は主格を表している．また，この「い」がなくてもその直前の名詞が主語であることは統語的に理解されると同時に実際にこの i が脱落している文が多く存在するので，この「い」を主格・強調機能と考えてよい．さらにこの機能の出現頻度から考えて，この機能はこの時期には生産性がだいぶ落ちていたのではないかと考えられる．

この用法はアイヌ語の三人称主格指示用法に最も近く，古代日本語においては三人称の例のみであり，その点でも共通している．しかしながら，アイヌ語では接頭辞であり，古代日本語では接尾辞に対応している．接辞が異っていることは全く問題にはならないが，その点においては指示詞用法の節で述べる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語の i は古代日本語のそれとほぼ同じ機能をもっているが，古代日本語には見られない呼格の機能が存在している．即ち，主格・強調，対格・強調，具格，処格，呼格，名詞の被覆形形成機能の六つの機能が見られる．下に主格・強調の例を示す：

(1) ototaru-i kimokarato...

［おもろさうし 14-11 (992)］

ototaru-i　　kimo-karato

Ototaru-［主格］ 胆-から

「オトタルは心から（かわいがられ）...」

「おもろさうし」からは一例しか見当たらないが，この例ではこの i がその前の名詞が主格であることを示していると同時に，また主格を強調していると考えられる．それはこの i が存在しなくても主格を示すたくさんの例があるからである．これは古代日本語の i の機能と全く同じである．琉球語では主格は ga でも表されるのである．

古代日本語と同じように，この用法はアイヌ語の三人称代名詞主格指示用法と最も近いようである．

［4.2］対格・強調用法

(a) 古代日本語

(1) みつみつし久米の子らが頭椎い石椎い持ち...

［日本書紀，古事記 神武］

「久米部のものどもが頭椎の大刀を石椎をもち...」

この例文の「い」は両方ともに MC 伊/？ i/の表音文字できる表されているため，この i が対格機能を果たしていたことが分かる．

この対格・強調機能をもつ例はこの一例のみであるが，この例からも明らかなように頭椎と石椎が対象を示しており，この「い」がなくてもこの対象は対格を示していることがその後の動詞「持ち」から分かる．即ち，対象を強調する機能と考えられる．因みに「頭椎い石椎い」をそれぞれ一つの名詞と考える説もある(時代別1985：65)．さらにこの機能の出現頻度から考えて，この機能はこの時期には化石化していたのではないかと考えられる．

この対格用法はアイヌ語の三人称代名詞対格指示用法に最も近く，古代日本語の例は三人称の例のみであり，その意味でも非常に近い用法である．

(b) 古代琉球語

(1) ʃirotumo-i maʃi-i mitʃaru...

［おもろさうし 20-42 (1372)］

ʃirotumo-i　maʃi-i　　mi-tʃaru

田-［対格］　田の区切り　見る-［完了］

「田を，田の区切りを見た」

ʃirotumo とは田圃の意味であり maʃi とは田圃の区画の意味であるという説とこれらの意味不祥とする説，そしてこの二語を一つと考えその意味不祥とする説がある．この機能・用法とも古代日本語の対格・強調機能と全く同様であり，ここでも-i が二度反復され他動詞がその直後に位置しているという統語的一致はこの-i を対格・強調と認定するのには不都合は全くない．これは単なる偶然の一致として片付けられるものではない．

古代日本語の場合と同様，アイヌ語の三人称代名詞対格指示用法に最も近い．

［4.3］処格用法

(a) 古代日本語

(1) 此の国土い経を弘むるに...

［金光明最勝王経：平安初期点］

「この国で/に教えを広めて...」

この例文からこの「い」は現代語の「に」または「で」が対応し，また統語上から見ても処格を表しているといえる．この機能を持つ例文は他には見られなく，また古代日本語の初期のものにも見られないので，この機能は非常に早いうちに化石化してしまったものと見られる．これが平安時代に見られるということは古代日本語の初期に実際は存在していたものが文献に現れなかっただけではないのか．

さらに処格の「に」が「い」を圧倒し「い」の消滅をはやめたのではないかと考えられる（「に」は「い」の派生形であると著者は考える）．またこの例のように後の時代に仏教などの経文などにその古い痕跡を留めていたと考える．

(b) 古代琉球語

(1) Fukamitʃi-i yaki-no-omoiki-ya matʃiyori...

［おもろさうし 14-15 (996)］

Fukamitʃi-i　yaki-no-omoiki-ya

西の道-［処格］ ヤキ-［所有格］ -思い人-［強調］

matʃi-yori

待ち-いる

「西の道でヤキの思い人が待っている」

上述のように古代日本語にはこの「い」は現れないが，平安の経文にその痕跡を留めているのに対して，古代琉球語ではこの「i」が現れる．外間 (1981：225) などの学者はこの「i」は「ha」と読むとしているが，伊波の版本を除く他の版本は「i」であるので，これはやはり「i」と読むべきであろう．従って，ここに示したように古代琉球語には処

格の「i」が存在したのである．後期古代日本語の「い」と同様に処格「に」との競争に負けてしまい，「i」が消失しその代わりに「ni」が台頭して来たのではないかと考える．

[4.4] 具格用法

(a) 古代日本語

古代日本語には具格用法はないようである．

(b) 古代琉球語

(1) katanautʃi-i jakuni toyomiyoware

[おもろさうし 1-5(5)]

katanautʃi-i jakuni toyomi-yoware

刀差し-[具格] 国 響き渡る-[尊敬]

「刀差しで国を轟き渡り給え」

katanautʃi は連用形をなし，名詞的な形態となっている．その名詞形にこの接尾辞-i が付き統語的にも意味的にも一貫性のある文であるためにはこの接尾辞は具格の機能でなければならない．この機能は古代日本語には見当たらないが，これも日本［・琉球］祖語が保持していたものを琉球語が継承したものではないか．その機能がさらに古代日本語では消失してしまったのではないかと考えられる．ただこの例からは名詞化したものに接尾辞が添加されている例であり，名詞そのものに添加した例ではないのが幾分気掛かりである．

[4.5] 呼格用法

(a) 古代日本語

古代日本語には呼格用法は見られないようである．

(b) 古代琉球語

(1) otomako-i akamako-i okaruna

[おもろさうし 14-17 (998)]

otomako-i akamako-i okaru-na

オトマコ-[呼格] アカマコ-[呼格] いる-[疑問]

「オトマコ，アカマコ 家にいるのかい」

この例文の otomako, akamako の '-ma-' は女性を意味するとされ（外間&仲原 1967：76），この単語全体で名前を示すと考えられる．しかし後者は未詳となっているが，前者が名前であることからこれも女性の名前であると考えてよいと思う．また文の意味から考えて okaru は owaru の誤写と考えられ，これは「いる」という意味であり，この-i は呼格か主格かの可能性が出てくる．これは呼格が最もふさわしいように思う．それはこの文の直後に続く文，mata ogayaheyori owayorina，ekeri aji（あなたの家からおいでになったのですか？，兄なる領主様）と領主にきいていることから，この直前の文（例文1）は領主が相手に直接尋ねていることになる．従って，『文』と言うより『発話』と考えられるから主格というよりは呼格のほうがより適切であると思う．

これまでの格接尾辞の用法はアイヌ語の人称格接頭辞/接尾辞に最も近い用法である．

前述のように，このアイヌ語の用法は古代日本語の二人称代名詞用法をもたないが，これは本来三人称代名詞用法であると考えられることから，三人称代名詞という点でアイヌ語の人称代名詞と同源であると考えられる．

[4.6] 名詞の被覆形形成用法

(a) 古代日本語

(1) saka-「酒」+i>$sake_2$

(2) ama-「雨」+i>ame_2

上例で見るように名詞そのものの形態素がそれ自体では存在し得ず常に i という被覆形形成接辞を添加することを必要とする．本来はこの接辞が添加されなくても名詞として独立し得たのかもしれないが，上記のように i を添加して自立した名詞として存在する．これは下記に見るが，琉球語にも同じ現象が見られる．

(b) 古代琉球語

(1) saka-「酒」+i>sake

(2) ama-「雨」+i>ame

この機能は古代日本語のそれと全く同様であるが，古代琉球語の場合には被覆形も露出形も両方存在する名詞とそうでないものがあり，その名詞によって異なるのが古代日本語との大きな違いである．例を挙げると以下のようなものが目に入る．

(1) ama-kasa「雨傘」
[混効験集 坤一乾坤]

(2) ama-koFi「雨乞い」
[南島歌謡大成 沖縄篇上 オ38-2]

(3) ama-dare「雨垂れ」
[南島歌謡大成 沖縄篇下 全2713]

(4) ami-gumu「雨雲」（=ame-gumo）
[南島歌謡大成 沖縄篇上 ウ415-8]

(5) ame-komori「雨小堀」
[南島歌謡大成 沖縄篇上 ミ6-36]

(6) ami-tari「雨垂れ」（=ame-dare）
[南島歌謡大成 沖縄篇下 天560]

一般に上記の例(3)と(6)のような ama-と ame-が同じ形態素に付くということはほとんどないようだが，上記の他の例をみても分かるように，異なった形態素と結合するとみてよいと思う．これは sake にも当てはまる．しかし，その結合の規則［どの形態素が ama-/ame-のどちらに付くのか］はないように見える．可能性として考えられるのは古代日本語の ama-系から借用されたのではないかと考えると同時に，一般に露出形が古い形態を保っていると考えられることから，この例もその一例であるので日本［・琉球］祖語から前琉球語に分岐した後，古代琉球語ではすでに被覆形にすべて変化してしまい露出語は存在しなかったと見る．即ち，古代琉球語ではama-の露出形がなく，ame-/ami-[<ame]の二つの系列があったと見られるが，ame/ami のどちらも本来被覆形であり，後に露出形を兼ねるようになったのではないかと考えられる．今のところこの考えを裏付ける文献は上がっていないが，その可能性は大いにあると考える．

意味の変化を考慮してみると，露出語は単語ではなく形態素であることからくる意味のあいまいさがあり，それだけでは意味をつけること自体不可能であるが，ただこれに付く語が「雨」と直接関係のある意味をもつことだけが分かる．それに対して被覆語はそれ自体形態素であると同時に単語でもあるので，その語は意味が明確になる．これは他のこのような対になっている形態素にも同じ原理が働く．

これまでの名詞群に付く接辞の機能の共通項をまとめると，それは『直示的/強調的機能』といえるのではないかと思う．

［5］動詞群に付く接尾辞

［5.1］述部導入接尾辞

(a) 古代日本語

まず2，3例を挙げ，その形態を見てみる．

(1) kak-+i>kaki-「書き」

(2) tat-+i>tati-「立ち」

(3) kög-+i>kögi-「漕ぎ」

この接尾辞-i は四段，上一段，上二段活用，不規則動詞にのみ適用できる形成法であるが，この形成法は非常に古くから存在していた痕跡の一部であると考えられる．伝統的な文法用語では連用形形成語尾ということになろうが，動詞から名詞を形成する名詞形成接尾辞とみることもできる．しかしながら，もしラ行変格活用動詞に接尾辞（活用語尾）-i が付いた終止形，例えば，'ar-i' や 'wor-i' などが四段活用動詞に接尾辞（活用語尾）-u の付いた終止形，例えば 'tat-u' などよりも古く，より基本的な形態であると考えると，この接尾辞-i は述部導入機能と考えられる．それはこの接尾辞-i が文を終止させることができるからである(cf.松本 1995：162-5)．この機能は上記の名詞形成接尾辞と相反する機能と一見見えるが，古代琉球語の述部導入接尾辞の所で述べるように，この機能を『名詞句型の述部導入機能』と考えると，一見矛盾と思われるこの接尾辞-i の機能を難無く解決できるのでここではこれをこの接尾辞の機能とする．その理由としてはその方が上記の形成法や下記の形成法をより統合した動詞体系の一部としてや上述した名詞の露出形と被覆形の関係と同様なものとして見ることができるからである．

アイヌ語における名詞化用法は語幹に直接接尾辞-i を付加すると同様に，古代日本語の名詞化，広義の述部導入詞でも同様に語幹に直接-i を付加する．この点において全く同様の機能をもつ接尾辞と言うことができる．但し，古代日本語では述部導入詞と考えられるので，名詞化と言うとあまり意味をもたない用法と見える．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様に，まず例をいくつか見てみる．

(1) kak-+i>katʃi-「書き」

(2) num-+i>numi-「飲み」

古代琉球語では一段と二段活用動詞にのみこの述部導入接尾辞が見られる．これも古代日本語のそれと同様に非常に古い形態素 i の痕跡であろう．またラ変動詞の終止形も古代日本語と同様に接尾辞-i で終わり，四段動詞の終止形と比較して，ラ変動詞のそれの方が基本的な形態であると考えられるので，この接尾辞-i は述部導入機能であると考えられる．

古代日本語と古代琉球語のこれらの共通した接尾辞の機能を見ると，日本(・琉球)祖語では述部導入機能が同時に連用形の名詞化接尾辞であった蓋然性が高く，その統語構造は A＝B（A,B は名詞類で，B が接尾辞-i をもつ用言）という名詞句で終止する最も簡素な形態をとったのではないかと思われる．このことはとりもなおさず，いわゆる連用形と終止形（-i で終止するものを基本とする）の接尾辞-i が本来同源であったことを意味すると考えられる．

アイヌ語との比較においても古代日本語と全く同様に考えられる．

［5.2］已然形形成用法

(a) 古代日本語

四段活用動詞の已然形（命令形も同様）-e_2は未然形形成接尾辞-a と已然形形成接尾辞-i との結合によって形成される．例をみてみると，

(1) ＊kak-a-[未然形：他動詞]+i>kake$_2$-「書け（ば）」

(2) ＊tat-a-［未然形：自動詞］＋i＞tate$_2$-「立て(ば)」

この已然形形成接尾辞-iは①の述部導入/名詞形成接尾辞-iと同源であろうと思われる．また未然形形成接尾辞-aが已然形形成接尾辞-iに対する関係は名詞の露出形-aがその被覆形-iに対する関係と全く同じである：

kak-a; kake$_2$-(＜kaka＋i)＝am-a;ame$_2$ (＜ama＋i)

動詞のこの接尾辞は「不定的でありまた範疇的」と特徴づけられるのに対して，名詞のこの接尾辞は「一定的でありまた特定的」と言った言葉で特徴づけられる（松本 1995：166）．このような意味付けによって已然形形成接尾辞-iは直示/強調機能であると考えてよい．例えば，

(1) 入り日さしぬれ$_2$［万葉集 135］
「入日がさしたので...」

この文における「さしぬれ$_2$」は強調呼応「こそ」を伴うべきであるが，伴わずにその動詞の已然形のみで表現している．これは已然形の本来の機能が，ちょうど名詞であればその被覆形が示すようにその動詞の語幹を自立語にすると共に強調するといった機能をもっていたことを暗示している．

(b) 古代琉球語

古代琉球語においても四段活用動詞の已然形（命令形も同様）-eは未然形形成接尾辞-aと已然形形成接尾辞-iとの結合によって形成される．例えば，

(1) ＊ik-a-［未然形：自動詞］＋i＞ike-「行け(ば)」
(2) ＊mat-a-［未然形：他動詞］＋i＞mate-「待て(ば)」

これらの例から分かるように，古代日本語の已然形形成接尾辞の意味，用法ともに全く同じであると言える．

［5.3］命令形形成用法

(a) 古代日本語

古代日本語にはこの接尾辞は見られないが，中世日本語の中に次のような例が見られる．

(1) お酌に参らいとの御諚（おのほせ）なり
［御伽草子：小栗絵巻］
「お酌に来なさいとおっしゃっている」

これは江戸時代初期からのものであるが，多分これが話言葉的な用法であったためこの命令用法は古代日本語にあらわれていないと見られる．一般に「参る」という動詞の命令形は「maire$_2$」であるが，この例では「maira-i」であり，「maira-」という未然形が見え，已然形の形態「-e$_2$」が形成される以前の形態「-a-i」であることが確認される．即ち，この例における形態は已然形が形成される前の形態が江戸時代初期にも維持されていたことを示しているものと考えられる．

また，現代の方言にはこの命令の機能があるものがある．例えば，この拙論の著者の方言である東北の仙台方言では命令形形成接尾辞-i(n) があらわれる：

(1) og-a-「置く：未然形］＋i(n)
＞ogai(n)「置いてください」
(2) haʃir-a-「走る：未然形」＋i(n)
＞haʃirai(n)「走ってください」
(3) mi-r-a-「見る：未然形」＋i(n)
＞mirai(n)「見てください」
(4) ud-a-「打つ：未然形」＋i(n)
＞udai(n)「打ってください」

この接尾辞-i (n) は個人差があり口母音/-i/から鼻母音/-ĩ/，そして/-in/ [iŋ] の3種類があるのではないかと見られるが，このうちの口母音が最も発達したものに見える．即ち，/＊-i-n/＞/-in/＞/ĩ/＞/i/という発達をとげて形成されたものと考えられる．/-i-n/のこの/n/はある種の接尾辞であると思われるが，その機能については現在のところ不明でありここでは深入りしない．

このような方言形はその方言特有の発達形である可能性もあるので，その方言形のみでもって命令/依頼の機能をもつ接尾辞-iが古代日本語に存在したことを証明するつもりはない．しかしながら，この接尾辞はこの方言の二次的発達形である可能性は極端に低く，またその形態の命令機能は古代日本語のそれからの痕跡ではないかと考えられる．その理由としては古代日本語または前古代日本語においてこの方言では動詞の語根に未然形-aが付きその直後に接尾辞-iが付いた形態［已然形と命令形は同形の語幹］がそのまま現在まで残存したのに対し，共通語ではそれが融合し，-a-iが-e$_2$に変化してしまったと考えられるからである．これを図式化すると次のようになる：

	語根	語幹[未然形]	語幹［已然形/命令形］
仙台方言：	kag-［書く］	kag-a-	kag-a-i-
共通語 ：	kak-［書く］	kak-a-	kak-e$_2$＜＊kak-a-i

この中世日本語の例や方言の例からこの命令の機能をもつ接尾辞-iは古代日本語にも存在していたであろうと思われると共に，この接尾辞はまれな存在ではなく生産的なものであったと考えられる．またこの接尾辞の機能は已然形のそれと同じであり，直示的，強調的な機能をもち，この機能は命令形においても特に抽象化されてはいるものの，二人称の対象に対して働きかけることからこの機能は已然形のそれよりも明確に理解される．形態論的には已然形の

接尾辞と同じなので名詞化する機能をもっていたと見られる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語には命令形形成用法は見つからない．

[5.4] 完了結果状態形成用法

(a) 古代日本語

古代日本語では次のように動詞だけでなく形容詞や名詞類から完了した状態の継続形を形成する接尾辞-i があったと見られる：

(1) * tata-[未然形：四段自動詞]＋i
　　＞$tate_2$-「立てる」：下二段他動詞
(2) * nura-[未然形：四段他動詞]＋i
　　＞$nure_2$-「濡れる」：下二段自動詞
(3) * taka-「高：形容詞」＋i
　　＞$take_2$-「長ける」：下二段自動詞
(4) * yo_2ko_2「横：名詞」＋i
　　＞yo_2ki_2-「よける」：上二段自動詞

形容詞や名詞類に関しては既に言及しているので，ここでは触れない．動詞のみに集中して見てみる．この接尾辞による派生動詞は他動詞的なものが非常に多く，この接尾辞-i が自動詞は他動詞に，他動詞は自動詞に変化させるような機能をもっているかのように見える．「自動詞的」から「他動詞的」な変化をとげたのは本来の完了結果状態を表す文が能動的に再分析されたためであると思われる．例えば，'tata nama-i'「盾並め」の本来の意味は「盾が並んでいる/並べてある」であったものが「盾をならべる」というように能動的に再解釈されたためである．古代日本語にはこのような本来の完了結果状態の意味をもつ動詞が少数ではあるが，存在しており（例えば，'wara-i'「割れている」' toka-i'「解けている」），本来の接尾辞-i の機能が『完了した結果状態の継続』であった傍証にもなる（松本 1995：163-5）．従って，四段動詞（例えば，tat-i「立ち」）と二段動詞（例えば，tata-i＞$tate_2$「立て」）の連用形はそれぞれ基本的述部導入形と派生的述部導入形であり，この二種の動詞は本来一つの動詞に遡るといえる（cf. 川端 1979：337；松本 1995：165-6）．

動詞の他動詞化という点においてはアイヌ語の接尾辞-i と全く同じ機能であるが，その変化過程も基本的には同じある．従って，同源の接尾辞であると考えられる．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様，次のように動詞だけでなく形容詞や名詞類から完了した状態の継続形を形成する接尾辞-i が存在したと見られる：

(1) * tata-[未然形：四段自動詞]＋i
　　＞tate-「立てる」：他動詞
(2) * tuka-[未然形：四段自動詞]＋i
　　＞tuke-「付ける」：他動詞
(3) * taka-「高：形容詞」＋i
　　＞take-「長ける」：自動詞
(4) * aka「赤：名詞」＋i
　　＞ake-「あける」：自動詞

古代琉球語の例 1 と 2 ではこの用法は古代日本語と同様なことが言える．全体的にこのような用法は少ないようであるが，接尾辞の付いた動詞はその動作が完了しその状態が保持されているものを表す．琉球語でも自動詞をそれに対応する他動詞へと変化させているのはその本来の完了した結果状態文が能動的に再解釈されたことを意味している（松本 1995：165）と考えて間違えないと思われる．

[6] 指示詞用法

[6.1] 指示詞

(a) 古代日本語

まず次の例文をみてみる．

(1) 新世に共にあらむと玉の緒の絶えじ<u>い</u>妹と結びてしこと果たさず..　[万 481]
　「新たになっていく世に共に生きて行こうと二人の中は決して絶えまい（その）妻よと，互いに約束したその言葉を果たさず..」
(2) 花待つ<u>い</u>間に嘆きつるかも　[万 1359]
　「その花を待つ（その）間におのずとため息がもれたことよ」
(3) 春風に乱れぬ<u>い</u>間に見せむ子もがも　[万 1851]
　「春風に乱れてしまわない（その）うちに見せる子があればいい」

例 1 では MC射/i͡ak/の表音文字で表されているのに対し，例 2 と例 3 では表音文字の MC 伊/？i/で表されており，どちらにしてもこの指示詞的機能をもつ i が存在したと考えてよい．

この用法は琉球語には見られず日本語のみにしか見られないが，その特徴は代名詞が常に連体形の動詞とその後の名詞に挟まれるという統語的特徴をもっている．即ち，その i の直前の動詞がその i を含むその直後の名詞を修飾し，その i がその直後の名詞を修飾，強調しているといえる．従って，意味的にはこの i はその直前の動詞節に言及する指示用法である．指示形容詞的用法と考えられる．

しかしながら，これはまた「事実」などを表す意味をも

つ抽象名詞とも考えられるという説もある．その場合にはこの抽象名詞は本来の強調・指示的用法から独立して発達したものと考えられ，もしそれが検証されれば，次の節で述べる名詞の類に分類されることになるが，次の節の用法とは統語的に異なりが見られるので，ここでは別の用法と考える（次節参照）．

この用法は接頭辞がその直後の名詞を修飾しているが，アイヌ語の三人称格指示用法の接頭辞 i-に近い．但し，格は古代日本語ではその名詞の直後の接尾辞によって決定される．これまで接頭辞，接尾辞そしてそれぞれにつく名詞，動詞と言うように分類して記述して来たが，接頭辞，接尾辞など多数存在するオーストロネシア諸言語ではある言語の同源語の「接尾辞」が他の言語の「接尾辞」にあたるとは全く限らず，その対応は特定できない．従って，もしアイヌ語の接辞が日本語の接辞と同起源であっても，例えばアイヌ語の接頭辞が日本語に接頭辞に対応するとは必ずしも言えないのである．このことはすべての項目に適応される．

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはこの用法は見られないようである．

[7] 名詞用法

[7.1] 名詞

(a) 古代日本語

前節の用法とは統語的に異なっているが，まず次の例文をみてみる．

(1) 此をたもついはほまれを招きつ　　[続宣命 45]
「これ（帝の位）を保つものは名誉を得る」

(2) 捨つるいはそしりを招きつ　　[続宣命 45]
「それを保てないものは身を滅ぼしてしまう」

この二つの例文の「い」は MC 伊/？ i/の表音文字で表され，i がこの名詞的機能を果たしたと考えることができる．

この名詞用法では例文からも分かるように，i の直前に動詞節が位置しそれが i を修飾してそれ全体が主題となる統語的な配置をしている．つまり，この i を名詞として解釈しなければならず，例文の現代語訳から分かるように，「もの」と訳せるが，「人」の意味も「物」の意味もあり，どちらの訳も可能である．

この用法は [6] の用法と同様，琉球語には見られないようであり，古代日本語のみに見られるが，反対に類似の名詞である si は古代日本語には見られず，古代琉球語のみに見られるという違いが見られるようである．またこの用法は古代日本語でさえもその例はほとんど見られず，この宣命の用法のみに見られるようである．その点から推察するに，この用法は非常に古いものであり，それが古代日本語の初期の段階にはすでに化石化してしまったと考えられる．

この訳，即ち，「人」かまたは「物」，のどちらが本来の意味であるかは決定しがたい．またこのどちらも本来の意味ではない可能性もあり，現段階ではこのどれをとってもそれを決定づける証拠は存在しない．従って，現段階では不明といわざると得ないが，オーストロネシア語族の様々な言語の指示的用法の i と酷似した例と比較して考えられること（Itabashi 1998）は第三の可能性，即ち，「人」「物」以外の意味からの派生も可能であり，もし指示/強調といった意味から「人，物」に派生したとすると，その蓋然性も高いのではないかと思われる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはこの用法は存在しないようである．

これまでの様々な i の用法のうちで共通しているものだけを簡単にまとめると次のようになる：

アイヌ祖語
(1) 人称格接辞
a) 三人称強調所有格（N に接頭）
b) 三人称所有格（N に接尾）
c) 三人称主格（V に接頭）
d) 三人称対格（V に接頭）
(2) 名詞化（V に接尾）

日本［・琉球］祖語
(1) 人称代名詞
a) 三人称代名詞
(2) 格用法
a) 主格強調（N［三人称の例のみ］に接尾）
b) 対格強調（N［三人称の例のみ］に接尾）
(3) 述部導入詞，名詞化（V に接尾）

§4 古代日本語と古代琉球語の接辞 si の様々な機能

[1] 人称代名詞用法

[1.1] 二人称代名詞

(a) 古代日本語

二人称代名詞には na/i/si/$o_2$re があるが，それぞれ異なった文体レベルにおいて使われる．ここにおける si の用法のみを記すが，まず例文を見てみる．

(1) しこれをばおれという［日本書紀 神武：即位前紀］
「あなたはこれをおれという」

他に例が見当たらないが，この例の「し」は MC爾/ńźie:/

の表意文字で表され（もし/ńźie:/の/-ź-/が無声音に近いとしたら，表音文字としても機能したのではないか），その意味は二人称代名詞「あなた」である．従って，これまでのように，二人称代名詞の機能をもっていたとする｛儞｝が/si/またはそれに近いものであったかは即断できないが，この例から si の用法には二人称単数の用法があった蓋然性が高い．また，この例から少なくとも指示詞ではないことは明らかである．これは他の二人称代名詞と比較し，また三人称代名詞にも si があることから，この si の二人称代名詞としての用法が本来のものであるとは考えにくい．従って，二次的に三人称代名詞から発達してきたのではないかと考えられる．その逆の方向の発達も考えられなくはないが，その蓋然性は低いと思われる．それは間接的ではあるが，史的変化の類型から一般に三人称から二人称への変化が圧倒的に多く見られ，事実の si の用法においても三人称の時より意味が特殊化し狭くなっていることからも，その変化の方向性が窺われる．また上述のアイヌ語の場合も同様に三人称から二人称への変化が見られ，日本語と同じ方向への変化である．

(b) 古代琉球語

古代琉球語には二人称代名詞の用法は全く見られないようである．

[1.2] 三人称代名詞

(a) 古代日本語

古代日本語では三人称代名詞の用法が見られる．二人称の用法をもつ i は三人称の用法は見られないのに対し，二人称の用法ももつ si は三人称の用法ももつとともに，si のみが三人称代名詞である．そのいくつかを示す．

(1) 美しくしが語らへば... [万 904]
「可愛らしく（私の子供）がいうので...」

(2) しが申ししことは... [続宣命 28]
「彼（仲麻呂）がいうには...」

(3) しが仕へ奉る様に従いて... [続宣命 24, 48]
「その人のお仕え申し上げる様に従って...」

これらの例では MC の漢字がそれぞれ異なり，例 1 では MC 志/tśi-/の表音文字のみを，例 2 では MC 之/tśi/の表音文字で表わすとともに指示詞と三人称代名詞の表意文字でも表している．例 3 では MC 自/dz'i-/「自身」の表音文字で表されていると考えられるのではないかと思う．従って，少なくとも例 1 と例 2 の 2 例がこの機能をもつ si であると解釈できる．

すべての例が三人称単数を示しているが，すべて人間を指していることから指示詞用法ではないことが明白である．この用法はこのほかにも数多く見られ，この用法が本来の用法ではなかったかとみられ，日本語〔・琉球〕祖語ではたぶん三人称などの人称代名詞と指示詞の用法の区別がなかったと考えられるが，それは指示詞の用法（下記参照）も同様に見られるからである．

この古代日本語の人称代名詞に対応するアイヌ語の人称代名詞用法は全く見られないが，この点が同源性において幾分気に掛かる点ではある．しかしながら，下記の接尾辞の強調用法がアイヌ語の強勢用法と同じであり，その点はその節で述べる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはsiは見られず，指示詞の *kareに取って代わられているが，これは *ka＋ *reに遡ると考えられる．古代日本語の三人称代名詞siと同形態をもつ古代琉球語は見当たらないが，古代日本語の一，二人称代名詞iと同形態をもつ古代琉球語は二人称代名詞の *ireの *iのみである．

[2] 名詞群に付く接尾辞

[2.1] 強調用法

(a) 古代日本語

si の接辞としての用法は接尾辞のみであり，接頭辞は古代日本語にも古代琉球語にも存在しないようである．さらにその接尾辞も古代日本語のみに存在している．次の例を見てみる．

(1) 寄り寝し妹を露霜の置きてし来れば， [万 131]
「寄り添って寝た妻を置いて来たので，」

(2) 君をし思えば寝ねかてぬかも [万 607]
「君を恋しく思っているので，私はなかなか寝付かれない」

(3) ほととぎすこゆ鳴き渡る心しあるらし [万 1476]
「ほととぎすがここを鳴いて渡る．ほととぎすにも心があるらしい」

例 1 と例 2 では MC 之/tśi/で，例 3 では MC 四/si-/で表音文字として表されているので，全く問題なくこのような si が他の機能とは異なり存在していたと考えられる．

接尾辞としての si の例は他にたくさんあるが，この接尾辞の用法は強調と考られ，他の用法はないようである．この強調用法の特徴は上例に見るように名詞群だけではなく動詞群にも接尾辞として付くことである．この接尾辞で興味深いことはこの接尾辞を表すのに「之」という漢字が使われ，この漢字の意味は後の「ぞ」や「こそ」と類似することである．しかしながら，統語的には「ぞ」や「こそ」は文を終止させることができるのに対し，si にはその機能がないという相違はある．この事実は i と異なり，この接尾

辞 si は形態・統語的にその直後の述部に影響を与えることがなく，その直前の名詞群や動詞群を強調，指示する機能である．

起源的には指示詞の si が一説としてあるが，その機能には相違があるとされ，意味的には上述の「ぞ」や「こそ」と同じである．しかし，この説は有力のように思われる．確かにその機能には相違があるが，それはあるものから発達したものであればその機能に変化があるのが当然であって，本来の指示する機能はこの強調機能によく表されていると考える．

古代日本語の動詞の接頭辞における強調用法はアイヌ語の接尾辞の強勢用法と全く同じであると見ることができる．但し，古代日本語では動詞の語頭に付き動詞を指示・強調するのに対して，アイヌ語では化石化した副詞的な用法のみである．しかしながら，指示・強調する点においては全く同じ機能である．

(b) 古代琉球語

上述のように古代琉球語には強調用法は見当たらないようである．

[3] 指示詞用法

[3.1] 指示詞

(a) 古代日本語

まず次の例文を見てみる．

(1) さしぶをさしぶの木しが下に生いたてる...
[古事記 仁徳]
「そのさしぶの木，その下にはえている...」

(2) 葉広ゆつ真椿しが花の照りいましししが葉のひろりいますは大君ろかも
「葉の広く美しい椿が繁茂しているが，その花の照り輝くように，その葉の寛にあるように，我が大君は立派におわしますことである．」[古事記 仁徳]

(3) 老人も女童児もしが願ふ心足ひに撫で給ひ治め給へば... [万 4094]
「老人も女も子供もその願う心の満足するように愛撫なさりお治めになるので...」

例1と例2では「し」を同じ MC斯/sie/で表音文字として表し，例3では MC之/tśi/を表音文字として「し」を表すのに用いている．即ち，上例すべての si はこのような特別の機能を有するものとして存在していたと考える事ができる．

上例はどれも「それ」と言い直すことができ，指示詞としての機能を表している．ここでの訳から指示詞「そー」に対応しているが，原文では「が」がその直後にきており，その「が」は属格機能を示しているので，si は全く「そ」と同じであると解釈できる．即ち，si の直前または前出のものを指し示している：例1では「さしぶの木」，例2，3では「椿」．例1，2では直前のものを，例3では前出のものを指している．

この si の用例は非常に少ないが，それは「そー (so_2-)」系によって取って代わられたからであると考えるが，この si の用法は本来生産的であったと考えられ，「そー」系がその機能を拡大するに従って，この si の機能も徐々に特殊化してきたのではないかと見られる．

(b) 古代琉球語

この用法は古代琉球語には見られないようである．

[4] 敬称名詞用法

[4.1] 敬称名詞

(a) 古代日本語

この敬称名詞用法とは「お方」と言う意味をもつ名詞が連結詞「の」を介して「〜のお方」と言う言い方を取ることであるが，古代日本語ではこの用法は見当たらない．次の琉球語にのみ見られる用法である．

(b) 古代琉球語

この敬称名詞は抽象名詞の一種であるが，その用法としては必ずその直前に連結詞「の」を伴い，接尾辞的な形態を取る．しかしながら，si そのものに語彙的な意味を備えているので，ここでは接尾辞とは考えず名詞として扱う．まず用例を見てみる．

(1) ちやなのしは，ねいしやり，...
[おもろ 15-48(1099)]
ちやな-の-し　は　ねいしやり
謝名-[連結]-お方 [題目] 音頭をとって
「謝名村のお方は音頭をとって...」

(2) たうのし，なむちや，こかね，もち，みちゑる
[おもろ 15-48(1099)]
たう-の-し　なむちや こかね もち みちゑる
堂-[連結]-お方 銀　金　持ち 満ちる
「堂村のお方は金，銀を満ちるほど持ち...」

(3) きせのしやわかおとちや... [おもろ 17-7(1181)]
きせ-の-し　や おとちや
喜瀬-[連結]-お方 や 兄弟
「喜瀬村のお方や私の兄弟...」

古代日本語はこの用法を持たないが，i という指示詞や si という三人称代名詞，指示詞を持つが，後者の用法に非常に近いだけでなく，これから発達した用法ではないかと

考えられる．それは古代日本語の三人称代名詞用法は古代琉球語の敬称名詞用法とともに指示詞的な用法で共通しており，前者は後者よりもその語彙的意味の範囲が広く，意味がより特殊化されていないからである．琉球語においてこのような同じ意味上の史的発達が見られる．即ち，*ire の *i と ʃi「し」は形態的に同じなだけでなくお互いに語源関係をもつと考えられる．

*ire< *i［三人称］+ *re［接尾辞］：前琉球

ʃi「方」（敬称）< *si：前琉球

上例すべてにおいて「し」は敬称を示しその名詞句全体が「謝名村，堂村，喜瀬村出身のお方」（一般にはその村の長）という意味からさらに特殊化しその人の名前となり通称として使われる．

ここで si の両言語に共通する用法をまとめると：

アイヌ語

(1) 名詞群に付く接尾辞：

強勢用法

古代日本語

(1) 名詞群に付く接尾辞：

強調用法

以上のように強勢または強調用法という本来指示的な機能の分化したものと考えられる．

最後に i と比較して si には語に接尾する形態のみを持ち，接頭する形態（接頭辞など）を持つものは全く見当たらないのも一つの特徴と考えられる．また大野（1962：502-3）が指摘しているように，si は条件句にもちいられるが，その直後の節が推量，希望，勧誘などの助詞や助動詞であることから，si は「話者が控えめな気持ちを表す機能」を有していると見られる．即ち，これは si による対象があまり限定されていないためにその非限定の部分に話者の気持ちが入り込むことができる（崎山 1990：211）ということを意味しているように見える．

結　　論

以上が古代日本語と古代琉球語における i と si の機能のすべてであるが，i の機能に比べて si のそれはずっと数が少ないのが特徴的である．i と si のそれぞれの機能領域の境界が必ずしも明確に浮上してこないが，i は対象が特定的，限定的であると考えられるのに対して，si は対象が非特定（全体）的，非限定的であると見ることができるのではないかと考えられる．それはアイヌ語の i には全体的に当てはまるのに対し，si には強勢用法という点で当てはまるのではないかと思われる．

この両言語に見られる同形態そしてほぼ同じ用法はこの i と si の一部とが本来何らかの関係を持っていたのではないかと考える．その際，その関係とは同起源，借用，言語接触，そして偶然の一致のどれかであろうが，この最後の偶然の一致ではないであろうことはあまりにも形態上の一致が見いだされる点から，明白であろう．そうすると前者の 3 項の内どれかということになろうが，借用でもなさそうに見えるが，それはアイヌ語がこれらの広範の機能を日本語から借用したとすると，その他の形態論上の機能も借用したであろうと考えられるが，実際はそのようなことはなく形態論上の共通項はあまり見つからないからである．従って，これは同起源かまたは言語接触による多量借用（起源的には同起源の語といえるが，言語全体としては混成語）と考えられる．しかし，この両者の一方であると断言することは不可能であり，ただここで言えることはどちらにしてもこの i と si は共通し，これらの語だけに限って言えば，同起源といえるであろう．しかし，この問題を解き明かす鍵の一部は(1)オーストロネシア語族の諸言語に現れる i と si の用法・機能と比較であり，日本列島の諸言語のそれと意味上のまとまりと機能の分岐の仕方において共通していると考えられる，(2)アルタイ諸言語における（特にツングース語族）三人称代名詞 i/si の用法や韓国語の i の様々な用法があり，それらの同源性の有無にあるのではないかと見ている．それはそれぞれ別の場（1998）で述べることにする．

参　考　文　献

日本語：

1．飯田季治　1937　日本書紀新講（上，中，下），明文社
2．板橋義三　1990「古代韓国語の人称代名詞の起源について」，言語科学（九州大学言語文化部紀要）No.25
3．板橋義三　1998(forthcoming)「古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の類似性(1)」『語源探究』No. 5
3．梅松安＆大塚龍夫　1934　古事記全釈，国民教育社
4．大野晋　1957　日本語の起源，岩波書店
5．川本嵩雄　1978　南から来た日本語，三省堂
6．川本嵩雄　1980　日本語の源流，講談社
7．釘貫亨　1997　古代日本語の形態変化，中央書院
8．西郷信綱＆外間守善　1972　おもろさうし，日本思想体系18，岩波書店
9．鳥越憲三郎　1968　おもろさうし全釈，全五巻　清文堂
10．中原善忠＆外間守善　1965　校本　おもろさうし，角川書店
11．中本正智　1983　琉球語彙史の研究，三一書房
12．服部四郎　1959　日本語の系統，岩波書店
13．平山輝男＆中本正智　1964　琉球与那国方言の研究，東京堂
14．福田昆之　1989　日本語とツングース語　改版，FLL
15．外間守善　1981　日本語の世界，中央口論社
16．外間守善　1988　おもろさうし，岩波書店
17．松本克巳　1995　古代日本語母音論，ひつじ書房
18．ミラー，ロイ A.　1981　日本語とアルタイ諸語，大修館書店
19．ミラー，ロイ A.　1982　日本語の起源，筑摩書房
20．村山七郎　1950「古代日本語における代名詞」，言語研究 No.

16, pp.40-7
21. 村山七郎　1962「日本語のツングース的構成要素」，民族学研究 No.26-3　pp.157-167
22. 村山七郎　1981　琉球語の秘密，筑摩書房
23. 村山七郎　1995　日本語の比較研究，三一書房
24. 山田実　1981　奄美世論方言の体言の語法，第一書房

1. Aston, W.G. 1988 *Nihongi*, Tuttle
2. Itabashi, Yoshizo 1989, "The Origin of the Old Japanese Accusative Case Suffix *i*", *Ural-Altaische Jahrbücher, Neue Folge*, Band 9
3. Itabashi, Yoshizo 1991, "The Origin of the Old Japanese Genitive Case Suffixes **n/na/nö/ŋga* and the Old Korean Genitive Case Suffix **i*", *Central Asiatic Journal* 35/3-4
4. Itabashi, Yoshizo 1993, "A Comparative Study of the Old Japanese and Korean Nominative Case Suffixes *i* with the Altaic Third Person Singular Pronouns", *Central Asiatic Journal* 37/1-2
5. Itabashi, Yoshizo 1998 (to appear), "The Old Japanese Personal Pronouns As an Etymological Problem", *Urasian Studies Yearbook No.7*

アイヌ語：
1. 片山龍峯　1993　日本語とアイヌ語，すずさわ書店
2. 萱野茂　1996　アイヌ語辞典，三省堂
3. 金田一京助＆知里真志保　1936　アイヌ語法概説，岩波書店
4. 金田一京助　1960　アイヌ語研究，三省堂
5. 田村すず子　1971「アイヌ語沙流方言の人称代名詞」，言語研究第59巻
6. 田村すず子　1972「アイヌ語沙流方言の人称の種類」，言語研究第61巻
7. 田村すず子　1988「アイヌ語」，三省堂言語学大辞典，三省堂 pp.6-94
8. 田村すず子　1996　アイヌ語辞典：沙流方言，草風館
9. 中川裕　1987「アイヌ語の人称接辞」，国文学：解釈と鑑賞，第52巻，2号
10. 中川裕　1995　アイヌ語辞典：千歳方言，草風館
11. 服部四郎　1964　アイヌ語方言辞典，岩波書店
12. 藤原聖明　1994　アイヌ語正典，新泉社
13. ポンフチ　1993　アイヌ語は生きている，新泉社
14. 村崎京子　1979　カラフトアイヌ語：文法編，国書刊行会
15. 村山七郎　1988　北千島アイヌ語，吉川弘文館
16. 村山七郎　1992　アイヌ語の起源，三一書房
17. 村山七郎　1993　アイヌ語の研究，三一書房
18. 村山七郎　1995　日本語の比較研究，三一書房

1. Itabashi, Yoshizo (forthcoming), "Ainu and Austronesian: A Morphological Parallel",
2. Refsing, Kirsten 1987, *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*, Mouton
3. Vovin, Alexander 1993, *A Reconstruction of Proto-Ainu*, New York: E.J.Brill